

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 感染症の歴史と道德教育

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤田, 浩一, Sawada, Koichi メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000643 |

感染症の歴史と道徳教育

澤田浩一

未曾有の事態が生じたとうろたえていた。しかし、歴史を紐解けば、今にはじまったことではなかった。感染症の時代は終わったというのは、浅はかな勝手な思い込みに過ぎなかった。先人が体験の中から得たものを後世の人々に伝えようとたくさんの物語を残してくれたのに、聴く耳をもたずに生きてきた。歴史から学ぶということとは、なんと難しいことなのだろう。感染症の歴史をすっかり忘れていた。想像力を失い、天然痘もハンセン病もペストも肺結核もエイズも、自分事として考えることができなくなっていた。

十年前、文部科学省で中学生用道徳教育読み物資料集を作成していた。東日本大震災が三月に起こり、「生命の尊さ」の教材を作り直すことになった。悲しく苦しい状況の中にあつて生き抜くことの大切さを伝える教材を届けたい。奇しくも作成した教材は、二百年前の江戸時代後期の二人の人物を取り上げたものとなった。現在の大分県の日田で咸宜園という私塾を開いた広瀬淡窓と大阪の船場に適(適々齋)塾という蘭学の私塾を開いた緒方洪庵である。洪庵の資料は、種痘の普及に取り組んだ様子を描き、「絶やしてはならない」と名付けた。洪庵は、幕末に大流行したコレラの治療にも尽くした人物である。教材作成の中で、長崎で牛痘接種に携わった水戸藩士の蘭方医柴田方庵が、洪庵に出した手紙を見つけた。方庵の妹の子孫である私は、二百年前の先人たちと繋がっていることを実感することができた。生命がずっと続いてきたことの有り難さを意識する機会は、めったにないことだと思ふ。感染症により生命が奪われる苦難の中を生き抜いた先人の努力を、多感な中学生の時期に知ってほしいと思ふ。

道徳教育の中学校学習指導要領の内容項目「生命の尊さ」とは、「生命の尊さについて、その連続性や有限性などを含めて理解し、かけがえない生命を尊重すること。」と示されている。道徳科の学習指導要領の解説では、小学校の中学年において生命の有限性、高学年において生命の連続性、中学校において生命の偶然性を理解し、人間としての生き方についての考えを深めるとされ、偶然性は、自分が今ここにいることの不思議と言ひ換えられている。宇野千代は自伝的小説『生きていく私』の中で、九歳ではじめて感じた死の恐怖を見事に描いている。パスカルの言葉通りに「われわれは絶壁が見えないようにするために、何か目をさえぎるものを前方においたあと、安心して絶壁のほうへ走っている。」新型コロナウイルスによる緊急事態宣言で、絶壁が露わとなり生命の意味への問いが突きつけられたと想う。

二百年後には、東日本大震災も忘れ去られてしまうのだろうか。感染症の流行も大震災も繰り返し起こる。八六九年の貞観の大地震も一六一一年の慶長三陸地震もいつしか忘れ去られた。二十代以下の若者たちには、阪神淡路大震災の記憶はないに違いない。道徳科の教科書に「語りかける目」という教材がある。家屋の下敷きになった母を助けられなかった少女の哀しい姿を警察官が書き留めた手記である。二十六年の間、この少女にとつて時はまだ止まったままなのではなからうか。ずっと活用し続けることで、後世まで長く語り伝えることができると信じた。

一般的には、道徳とは、人間社会における行動の規範、掟を意味し、道徳教育とはそれらを子どもに身に付けさせることと考えられている。学習指導要領では、道徳教育の目標は、人間の在るべき在り方に根ざした自己の生き方についての考えを深めることを通して、自立して他者と共によく生きる道徳性を養うことと示されている。偶然性の問題について深く考察した哲学者九鬼周造によれば、道徳とは行為によつて存在が建設されることである。九鬼は、哲学を判断による存在一般の根源的会得、芸術を趣味による存在の翫賞、宗教を祈りによる存在の礼拝であるとした。そして、会得も翫賞も礼拝も存在の建設にあずかっているのであるから、広義の道徳の領域に成立すると考えた。今ここに生きていることの不思議、生きていくことの有り難さを生徒・学生と共に考え、共に語り合いたいと想う。

(日本道徳教育史・社会科公民科教育)